

1. 診療科紹介 (膠原病・リウマチ内科領域プログラム)

項目	内 容
① 診療科名	膠原病内科・リウマチ科
② 診療科の特徴	<ul style="list-style-type: none">・東海地区では数少ないリウマチ内科系診療科。・市中の3次救急病院で、急性～慢性期まで対応。・各診療科が充実しており、診断～治療まで一施設で完結できる環境。・関節リウマチ治療で歴史のある整形外科や、肺高血圧症の経験豊富な循環器内科とは合同カンファレンスを通じて密に連携。・診断・鑑別に関節エコーを積極的に活用。・治験にも数多く参加し、最先端の治療に積極的に関与。
③ 診療科のモットー	患者さんに最新・最良の医療を提供できるように努めています。
④ 診療内容・実績 (2024年6月時点)	令和5年度の外来患者数は1日平均62名、年間15093名、入院患者数は328名で主な疾患は関節リウマチ38名、血管炎症候群39名、SLE23名、多発性筋炎・皮膚筋炎22名、強皮症29名、ベーチェット病5名となっています。
⑤ 診療体制	リウマチ指導医 3名、リウマチ専門医 7名、総合内科専門医 5名。
⑥ 診療科カンファレンス	週2回 診療科カンファレンス 合同カンファレンス（循環器内科・整形外科(不定期) 腎臓内科（一時休止中））
⑦ 経験できる疾患	膠原病全般
⑧ 経験できる技術・技能	関節エコー、関節穿刺、内科の手技全般
⑨ 学会について	日本リウマチ学会、日本内科学会
⑩ その他	藤田医科大学病院 リウマチ・膠原病内科とのプログラム連携

2. 専攻医・後期研修医へメッセージ

「膠原病」と聞いて、どんなイメージを持ちますか？「珍しい病気」「診断が難しい」「抗体がたくさん…」「治らない？」そんなふうに、少し近寄りがたい印象を持つ方もいるかもしれません。

でも実は、膠原病の入り口となる症状はとても身近なものです。たとえば、発熱・倦怠感・関節痛・皮疹・息切れ・咳・手足のしびれなど。これらは、どの診療科でも遭遇する可能性がある症状であり、膠原病は鑑別診断に必ず挙がる疾患群です。

「この関節は腫れている？」 「この紫斑は血管炎？」 「この不明熱は膠原病？」 「抗核抗体が陽性だけど、意味があるの？」 こうした臨床的な疑問に向き合う経験は、後期研修の大切な時期にこそ得てほしいものです。きっと、内科医としての診療に深みを与えてくれるはずです。

治療と実践から学ぶこと

ステロイドや免疫抑制剤、生物学的製剤などの治療薬を実際に使うことで、薬の知識が深まるだけでなく、骨粗鬆症や免疫抑制下での感染症などの合併症への対応力も身につきます。

当院で膠原病を学ぶ魅力

東海地方では、膠原病を専門的に学べる施設は限られています。その中でも、各専門領域がそろった市中の三次救急病院 という環境は非常に貴重です。中枢神経・心血管・肺・腸管・腎など、重要臓器に病変を伴う重症例では、各専門科との連携が不可欠です。当院では、他科とのコンサルトの垣根が低く、必要に応じて協力体制を築きながら、あらゆる症例に対応しています。

チームの雰囲気とサポート体制

当科には、若手からベテランまで幅広いスタッフが在籍しており、アットホームな雰囲気の中で診療を行っています。膠原病の知識だけでなく、専攻医としての成長を多方面からサポートできる体制が整っています。

「膠原病を一度、専門的な視点から学んでみたい」 そんな思いを持つ先生方、ぜひ一緒に学びましょう。皆さんのご参加を心よりお待ちしています。

膠原病・リウマチ内科領域専攻医募集

経験目標症例数

主要疾患	経験目標症例数（3年間）
全身性エリテマトーデス	10
関節リウマチ	50
全身性強皮症	10
多発性筋炎・皮膚筋炎	10
血管炎症候群	15
混合性結合組織病	5
シェーグレン症候群	15
リウマチ性多発筋痛症	10
成人スティル病	5
乾癬性関節炎	2
強直性脊椎炎	2
不明熱	20
IgG4 関連疾患	5
膠原病性肺高血圧症	2
抗リン脂質抗体症候群	5
血球貪食症候群	2

腰椎穿刺	10
胸腔穿刺	10
関節穿刺	20
血漿交換療法	2
生物学的製剤投与・管理	20
関節エコー	100

診療体制やスタッフ・診療実績などはホームページをご覧ください。